

まんとさく



公開シンポジウム 開催される

平成十五年十月十九日(日)午後三時、新見商工会館五階大会議室において、公開シンポジウム「阿新地域と新見公立短期大学の将来像」が開催されました。

シンポジウムの内容は次のとおりでした(敬称略)。「パネリスト」「新見公立短期大学の現状と課題」「新見公立短期大学学長 難波正義」「阿新地域と新見公立短期大学」阿新広域事務組合理事・哲西町長 深井 正、「日本の短期大学の現状」日本私立学校振興共済事業団私学経営相談センター長 佐野清克、「開かれた短大の可能性」備北新聞社長 仲田芳人、「新見公立短期大学の四大化」備北民報社長 秋月皓淳、「経済界から見た新見公立短大の存在感」新見商工会議所会頭 新中淑弘、「コーディネーター」ジャーナリスト・新見公立短期大学講師 為田英一郎。

会場には多数の市民・関係者のご参加をいただき、盛会のうちに無事終了いたしました。フロアからも貴重なご意見・ご提言をいただき、地域と本学の将来にとって大変有意義なシンポジウムとなりました。関係者の皆様に深く感謝申し上げます。なお、シンポジウムの概要は本学ホームページで公開しております。



発行 新見公立短期大学(岡山県新見市西方一二六三の二) ☎〇八六七―七二―〇六三四

編集 学報編集委員会

看護学科

成人看護学実習を終えて 三年次生 江頭明子

いよいよ三年生最後の実習である成人看護学実習となった。四週間という長い看護実践の場となった成人看護学実習は、緊張と不安で一杯で立て方が大まかになりすぎたり、ベットメイキングや清拭などが迅速にできなかったりとかくさんの失敗をしていました。先生や看護師の方々からご指導を頂いても、理解しようとする心とは反対に体が思うように動かない日が続き何度も情けない気持ちで帰宅していました。看護計画では、患者様が使用されている医療器具の全てに事故の可能性を想



実習前の学内演習

定して安全に対する意識を高めることを学び、清拭など直接体に触れる時には、お湯の温度が冷めないように気を配ったり、物品を効率良く配置したり、少しでも迅速にできるように手順をシミュレーションしてやることを心がけました。また、薬剤の中には、その日の状況によって変更されているものもあり、確認や報告の重要性を学びました。

実習を終えてみると「やはり勉強し努力し続けなければ進歩はない」と感じました。悔やんでばかりではないけないということ、何が問題だったのか、今後どのようにしたらよいのかと、自分を律して工夫を重ねることが大切ではないかと思えました。様々な状況の患者様を前に失敗は許されないことですが、学生時代の失敗や成功の体験は現場に巣立つ時「自分を支える根っことなる」と信じ、できないことや疑問を残さないで大いに助言や指導を仰ぐことが必要だと思いました。

ご指導賜りました先生方をはじめ、病院や施設の看護師の方々にこの場をお借りしまして、深くお礼を申し上げます。

臨地実習を終えて

三年次生 重信早織

三年間の実習は短いものですが、さまざまな実習施設を訪れることができ、とても貴重な経験になりました。

特に地域看護学実習では、役場や



地域での健康教室

診療所、訪問看護ステーションでの看護師や保健師の役割を実際に知ることが出来ました。その中で私は、地域住民への「指導」の難しさを感じました。健康な人に指導を行い、悪い生活習慣を改善してもらうには、本人の努力が必要です。診療所で生活習慣病の指導を行った際、食事に気をつけている、運動を続けているといった健康法を取り入れている方も多かったです。効果的に続けてもらうために、正しい知識を持ち、病気を予防してもらうことが大切だと思いました。地域看護学実習を終えて、地域住民の健康を支えていくことの大切さを学ぶとともに、さまざまな機関で、住民の健康を守る努力が行われていることがわかりました。全体の实習を振り返ると、一、二年生の実習では余裕を持っていました。三年次生では、患者個人に応じた看護を自分なりに考える

余裕が持てたと思います。実習中は、毎日学びきれないほど多くのことがあり、眠れない日々もありましたが、看護の難しさ、楽しさを経験することが出来ました。そして三年間の実習を通して、看護は、相手が満足して初めて成り立つことだと感じました。

卒業生と語る会

平成十五年十二月十九日に、卒業後の進路を考える機会として毎年行なっている、「卒業生と語る会」が看護学科二年生を対象に開催されました。今年には兵庫県立大学に編入した坂本美有紀さん(十七期生)、哲西町役場の保健師萩原美穂さん(十九期生)、倉敷成人センターの助産師宇宿真由美さん(十九期生)、看護師として、新日鐵広畑病院の伊郷実さん(二十期生)、しげい病院の西浦悠希さんの五名に近況を伝えてもらいました。

先輩たちの生き生きとした活躍ぶりに、将来の自分自身を重ねて、有意義な時間になりました。



絵・大野加奈子

鈴木ひとみさんの講演を聞いて

一年次生 古川 枝里

「老人・障害者の心理」の授業の補講ということで、十一月二十二日に大学に出かけた。十時開始。いつもの土曜日なら寝ている時間。「途中で睡眠モードにはいるのでは…」の不安がcaすめる。

補講のレポートテーマは「鈴木ひとみはどのように障害を受け止めたか」。早く答えが欲しい。ひとみさんは講演の開口一番に「よく尋ねられるが、そんなものはない」と言われた。答えをもらえなくなつた私は驚き、眠気なんか吹き飛んで、ひとみさんの話術に引き込まれていった。立ち直つていたり、後戻りしたりしながらだからと話され、車椅子で木に登っている夢の話やファッションショウでの自分の涙のわけなどを、もうレポートを忘れて私は聞いていた。

本当の恐怖は自分の中にある。一番つらいことは、身体が不自由なことでも、外に出られないことでもなく、実は自分が誰からも必要とされないことだとの話には感動した。それから、誰にも都合のいい環境がバリアフリーだということも「はっ」と気づかされたことだった。

身体が不自由になつたことで、今までのような生き方はできないかもしれない。しかし、今までとは違う

生き方ができる。自分と正面から向き合っているポジティブでバイタリティのある女性だった。

介護実習を終えて

一年次生 中田まりこ

「どうとう明日だ」実習前日、私は後悔でいっぱいでした。知識も技術も全然自信がなく、不安でたまりませんでした。しかし、実習自体は本当にあつたという間だった。私の行った実習施設は特別養護老人ホームの機能別で、職員の方についてまわるようになっていたので、仕事は忙しく、未熟ながらも少しは技術のほうも身についたと思います。

たつた二週間の実習でしたが、同じ日は一日もなく、一日一日何かしらの気づきを発見することができてとても嬉しかった。また、自分の最も苦手とする利用者さんとのコミュニケーションも自分なりに取れるようになってきたかなと思えるようになったので、良かったと思います。

今回の実習では、良いこともたくさんありましたが、逆に疑問に思つたりすることもありました。そういうことをこれからよく考えていき、利用者の方にとって良い介護ができるようにこれからもがんばっていきたいと思います。

健康まつりに参加して

二年次生 柴原麻実

私たちは、「新見庄まつり」で手

浴・足浴コーナー、頭すつきり体操お茶の試飲コーナーを行いました。手浴・足浴は、手足をお湯であったためマッサージを行い、安眠に導いたり、リラクゼーションを目的として行うものです。また、より気持ち良くリラクゼーションを受けていただくために、お湯にハーブのエキスを葉を入れたお茶を飲んでいただきました。体験された方から「とても気持ち良かったわ」と喜ばれてとてもうれしかったです。

また、脳を活性化させるとともに気分転換をはかる頭すつきり体操は、家の中でも気軽に行えるもので、高齢の方から若い方にも効果的なものです。これは、身体を動かすことで、気分をリフレッシュするとともに、痴呆を予防する効果もあります。

お茶の試飲コーナーでは、そば茶、ゴーヤ茶、緑茶などを用意し、飲んでいただきました。そして、たくさんの方に試飲に興味をもつていただきました。

これらの体験を通して、多くの人に喜んでいただいたことで、やりがいを感じるとともに、人との良い出会いを感じる事が出来ました。



絵・坂田美美

よろしくお願ひします

地域福祉学科講師 松本百白美



私は長い間、高齢者介護の現場で働いてきました。そこで、利用者から貰つた沢山の宝物を持っています。ひとつは、利用者から突然頭を撫でられ「元気で居られるように、お大師さんをお願いしてあげる」と真言を唱えていただいたことです。吃驚しながらも、何とも言えない嬉しい気持ちになりました。かなり高齢の方で体調も悪く、肉体的な衰えを抱えつつも、その内面に『人の幸せを祈る』という心の強さに触れたような気がして、とても感動しました。介護現場は肉体的にも精神的にも確かに忙しく厳しいところです。しかし、その疲れが吹き飛ばすほどの宝物を利用者がくれることがあるのです。学生の皆さんには、そんな宝物を沢山貯められるような介護福祉士になつて欲しいと思つています。そのため何ができるか、私自身も一生懸命頑張るつもりですので、一緒にがんばりましょう。どうぞよろしくお願ひいたします。

幼児教育学科

幼児教育学科教育研修センター報告

安達雅彦

昨年、幼児教育学科は教育研修センターを開設しました。今回は、その利用状況を報告いたします。

二〇〇四年一月末日現在での研修件数は三十件で、研修場所・方法の内訳は、学内での研修が五件、学外が二十一件、電子メールによる研修が四件です。学外での研修の中には、造形の金山和彦講師が記念モノUMENTの制作と設置のために渡米したのも含まれています。これは、大佐町と姉妹都市であるアメリカのニューパルツとの国際交流事業の一環として実施されたものです。また、教養科の英語担当の山内圭助教授が、新見市の思誠小学校からのご希望で、小学校における英語教育の教材研究や年間活動計画の立案などの研修を行いました。このように、幼児教育学科だけではなく、教養科、看護学科、そして地域福祉学科の教員も協力する体制をとって幅広い研修内容に広げるようにしています。

現在のところ卒業生からの研修は五件ですが、電子メールを利用することで、遠隔地からの研修も可能です。また、夏休み等の休業中の研修も可能ですので、早めにご相談ください。

三十件の研修のうち新見阿哲地域からは十一件で（全体の三分の一）、

まだまだ地域貢献としては十分ではありませんが、これから積極的に研修センターを利用してもらえるように、広報活動にも力をいれたいと考えております。

お問い合わせ先（新見公立短期大学内、幼児教育学科教育研修センター、安達雅彦・高月教恵 TEL:0867-72-0634/FAX:0867-72-1492 E-mail:yokyo2@nimi-c.ac.jp)

保育実習を終えて

一年次生 植田京子

緊張と不安でいっぱいだった初めての保育実習が終わりました。実習前は長いと感じていた十日間も終わってみると短かった気がしてくるから不思議です。可愛い子どもたちや優しい先生方と過ごした十日間。せっかく持っていたのに結局使わなかった風船や指人形、緊張のあまり音程をはずしてしまった歌、おぼしいれの中に子どもの残したお茶まで入れてしまい先生に注意されたこと等、苦い思い出や恥ずかしい失敗もたくさんあります。しかし現場で行われている保育を間近で見ることができ、実際にいうと本当に良い経験ができました。

この実習を通じて、私は私自身と向き合うことができました。前期に学習した内容を実習に活用できていないこと、なんとかなるだろうと思いついた練習しなかったため箸がうまく使えず子ども目の前で食べ物を落としてしまったこと等どれも「なんと

なくわかる(できる)」という甘い考えでいたために起こった出来事でした。このようないい加減な考えで子どもたちと過ごすのは失礼だと思えます。次回の実習に向けて自分自身を改善していきたいと思えます。

中四国保育学生研究大会に参加して

二年次生 原田仁美

今回、中四国保育学生研究大会に参加し、各学校の様々な研究を見ることができ、とても勉強になった。各学校の様々な発表を見学し、今までの授業や実習において学んできたこと、保育に関することや子どもに関する興味深い発表もあった。また、初めて知ったこともあり、まだまだ勉強不足で保育についてさまざまな情報を収集し、勉強していかなければならないと思った。

また、保育士を目指す学生の多さに驚いた。昨年の研究大会でも思ったことだが、新短の幼児教育学科だけでなく同じ志を持ち勉強している仲間が百人近くいるが、中四国だけでなく、それもほぼ全てが短大でこんなに多くの学生が保育を学び、同じ道に進もうとしている仲間がいるということとは、とても心強く、全国で考えたら保育学生はもつといるのだと思えば自分も頑張らなくてはという気持ちがいっそう増した。

これから、私も保育の現場へ出て行くことになるが、さまざまなことへアンテナを張って学びを深め、子どもと共に成長していきたい。

ニューパルツ在外研究報告

助教授 矢藤誠慈郎

昨年八月下旬より本年六月下旬まで、文部科学省在外研究員としてニューヨーク州立大学ニューパルツ校に出張しています。今はおもに初等教育学科のマーガレット・フェラーラ学長とピーター・エドワーズ教授との共同研究として両校の保育者養成方法の比較・検討をしています。日米の違いをよい悪いでなく、社会の仕組みや成り立ちの違いにともなうものと理解していますが、取り入れるべきこともいくつかあります。

大佐町とニューパルツの姉妹都市交流の関係で、地域の方にも親戚のようにかわいがっていたため、交流の一環として設置された金山和彦講師のモノUMENTの除幕式（大晦日）では、同講師、山内圭助教授、大佐町仲村正彦専門員も一緒に楽しい時を過ごしました。

自分の研究はもちろんですが、地域および大学間の交流にも貢献できるように努力し、帰国後は学んだことを様々な面で還元していきたいと思っています。



絵・坂田美美

同窓会の コーナー

〈海外特集〉

アメリカの 老人ホームに勤務

看護学科第十七期生

藤原智里

アメリカに来てから、はや三年あまりが経ちました。初めてアメリカに来た日の事を、つい昨日の事に思い出します。空港に降りたつたときには、不安と期待が入り混じっていました。短大一年生の夏休みにアメリカツアーに参加するまで、アメリカに来る気など毛頭なかった私にとつて、言葉の壁はさうとう厚く、言語学校で英語を勉強することから始めました。思う様に自分の意思が伝えられない事のもどかしさ、それに加えて、事ある毎に意見を求められたり、自分から事を始めないと誰も助けてくれなかつたりと、何度も日本に帰ってしまおうかと思ひまされた。そのたびに、周りの友達に励まされて、なんとか続ける事ができました。

様々な年齢層・バックグラウンドの人達と、同じクラスで学ぶ事が多く、同じ事柄をみても、違った方面からの意見がきけて、随分と刺激になりました。そして、病院に隣接する老人ホームに勤務する様になつてから、半年が経過しようとしています。日本とアメリカの文化の違いを感じる事も多々ありますが、毎日勉強だと思つて精一杯頑張つています。それぞれの個性を大切にできるケアができる様に、考えています。例えば、その日の服を選択する時にも、必ず患者の意見を取り入れる様にしています。英語なのでコミュニケーションを取りにくい事もありますが、向けられた気持ちの暖かさは通じると思っています。家族と患者とのふれ合いを見ているうちに、愛情とか患者の人生を垣間みる事ができ、勉強になつていきます。同時に、どうすれば患者のQOL(生活の質を保つ事ができるのか、毎日模索しています。やさしい同僚たちに支えられて、仕事にはげんでいます。

アメリカに来ればなんとかなると思つて日本を飛びだしてきましたが、思い通りにならない事が多く、友達や両親の支えなしでは、ここまでやつて来る事ができませんでした。いつも感謝の気持ちでいっぱいですが、私は、まだまだ夢の途中です。これからの事を考えると、不安だらけですが後悔しない様に頑張ります。みなさんも、学生生活を思いっきり楽しんでください。



オーストラリアに九ヶ月留学

看護学科第二十一期生

住山亜紀

私は短大二年生の春に第一回アメリカ研修旅行に参加しました。初めはドキドキしたけれど、彼らは私にわかり易い英語で話してくれました。とても聞き取りやすく話題も徐々に出てきてコミュニケーションも楽しく、会話がはずみました。家族と一緒に出かけたり、一日の話をしたり、冗談を言い合つたりして毎日とても充実した日々でした。たった十日間でしたがすごくいい経験もでき、学ぶこともたくさんありました。その後、日本に帰ってからメールや手紙時に電話のやりとりが続いており、家族が日本に来てくれたりもしました。

そんなやりとりが今も続いており、この十二月には約二年ぶりに二週間ほどニューパルツに行ってきました。みんな温かく迎えてくれ、さらに多くの人に会いました。人と出会うと必ず学ぶことがあり、何事にも挑戦しようという気持ちを持つと、様々なチャンスが生まれ、必ず自分にとっていい経験となりプラスになります。そうして自分を高めていってほしいと思います。私もこの出会いを大切に今後も関係が続いていきたいと思います。



アメリカホストファミリーとの交流

幼児教育学科第二十二期生

福田さやか

平成十五年度 卒業研究テーマ一覧

【看護研究】看護学科

■専門基礎

指導教員 宇野文夫

●重症急性呼吸器症候群（SARS）の発生における各国の対策と日本の課題に関する考察
住田 麻季

■基礎看護

指導教員 小野晴子・杉本幸枝・土井英子

●ナースコールを頻回に押す患者の精神的背景の調査 池田佳奈美
●成年後見制度の施行から3年経過した現状とこれからの課題
井上 義之

●日本人と外国人（米国）の清潔行動の相違 上岸ちひろ
●歴史とともに歩んできた看護服の変遷 江頭 明子

●足浴に関する研究の動向 大木本昌世
●相手をありのままに受け止めるための関わり 大越杏安子

●人間と「食」を食べることについての検討くさざみ食を摂取している患者へのインタビューを通して 西村 友江

●家庭における哺乳瓶消毒の実態調査くアンケート調査の結果から 福井喜三子

●介護者の精神的負担くGHQ精神的

健康尺度を用いて 丸山奈都美

●看護実践に生かすマッサージ療法 森本 恵

●患児の付き添い看護に関する研究く付き添いのある場合とない場合の母親の意見をを通して 渡邊かおり

■成人看護

指導教員 逸見英枝・金山弘代・真壁幸子・白神佐知子・太田浩子

●開発途上国の保健・医療の現状と国際協力活動の実際 池島 愛

●病院における生活環境についてく入院患者のインタビューを通して 岩田奈緒美

●テレビゲームが身体へ与える影響について 大西 初美

●成人看護学実習の振り返りく私が直面した困難な状況とその対処方法 大場 未来

●アトピー性皮膚炎をもつ学生の日常生活における問題点く面接調査を通して 甲斐美智子

●死生感について「死」をどう伝えていくべきかく子どもをもつ親へのアンケート調査 榊原 亜希

●患者の回復過程に伴った家族の心理変化く事故により緊急入院をした患者の妻へのインタビューを通して 杉本安由美

●糖尿病患者のフットケアの自己管理

の実践く外来患者からのアンケート調査 住山 亜希
●死別経験をした遺族の心理的变化く悪性リンパ腫で母親を亡くした友人のインタビューを通して 田中美穂子

●観察・コミュニケーション・死を看とることく受け持ち患者を通して学んだこと 鳴海 藍

●看護学生の歯磨き行動に関する認識調査 西山 美穂

●アロマセラピーの歴史の変遷くこれからの活用範囲を考える 原田知世子

●がん告知における立場による考えの違いについてくN短期大学生の考える告知と医療従事者の告知を比較して 水上 千明

●看護師の職業継続と婚姻状況 山本千奈未

●老年看護

指導教員 古城幸子・木下香織

●看護教育における災害看護学の位置付けくシラバスの中で表現された災害看護学の考え方 青木佐千子

●遊びリレーションが高齢者に与える影響くゲーム機を用いたリハビリに焦点をあてて 石野 智美

●高齢者の生活にメリハリをつけ、生活を豊かにするための関わり方、取り組みの実際 板崎 恵

●施設利用高齢者の人間関係の様相と援助者の役割くソシオグラムによる分析 河部 真里

●看護と介護の専門性を考えるく看護

学科と地域福祉学科の意識調査 國澤 愛

●リタイアメント・ビレッジについて 重信 早織

●高齢者虐待の現状と課題く介護保険制度導入後3年間の新聞報道から 田口ますみ

●過疎地の在宅高齢者の生きがいに関わるデイケアの意義くパワーリハビリテーションの効果 廣澤 智恵

●医療現場における方言の必要性 森山 和美

●小児看護

指導教員 上山和子

●学童期におけるアトピー性皮膚炎患児の援助くアトピー性皮膚炎患児のスキンケア確立に向けて 赤田 美佳

●喘息児の基本的な生活習慣の実態 上野真由美

●病児に対する育児支援の実際 中岡 九華

●障害を持つ子供の父親の受容過程を通じての支援くDrotaraの情緒的反応の段階を用いての分析 西村 竜太

●母親の育児不安の実態とその支援 森川 友賀

●母性看護

指導教員 貞岡美伸・福原博子

●ベビーマッサージによる母親の精神的効果 池田真由香

●妻の出産における父性の変化く立会い出産の有無の比較を通して 伊垢離けい子

●看護と介護の専門性を考えるく看護

●看護と介護の専門性を考えるく看護

●看護と介護の専門性を考えるく看護

●看護と介護の専門性を考えるく看護

●看護と介護の専門性を考えるく看護

●利用者視点からみる男性助産師の是非について
射場 晶子

●褥瘡の求めているものから考えた看護のあり方について〜経産婦によるインタビューを通して〜
賀田 静香

●親と子のふれあいタッチケアの中の主にベビーマッサージを通しての考察〜
渋谷奈美子

●障害をもつ子を産んだ母親が看護者に望むこと
高橋 朋子

●カンガルーケアについて〜その効果と母親や赤ちゃんに対する影響〜
玉木 美雪

●短大生の性役割アンケート調査より〜
藤原 千花

●精神看護
指導教員 塚本千恵子

●高齢社会におけるアニマルセラピーについて
樋口 紀子

●拒否を示す患者とのコミュニケーションについて〜精神看護学臨地実習を通して学んだこと〜
日高 由望

●地域看護
指導教員 金山時恵・栗本一美

●在宅痴呆高齢者の活動量と家族介護者の痴呆に対する思い
浅原 葉子

●在宅療養されている精神障害者の地域ケア体制
岩崎 麻貴

●障害を持つ人とその家族への地域支援
勝木由香里

●中学生の生活習慣と心身の健康への働きかけ
古東亜季子

●在宅療養における訪問看護師の役割・家族介護者が製作したアイデア用品を通じて
秦泉寺 愛

●健康診査における受診者の満足度とニーズ〜1歳半・3歳児健康診査でのアンケート調査に基づいて〜
榎 めぐみ

●『健康』と『自分らしく生きる』との関係〜難病患者の思いを聴いて〜
森本 順子

●褥瘡に対する家族介護者の知識調査
山田衣里子

●介護と就労両立へのニーズ〜家族・社会・専門職に求めること〜
山本佳代子



絵・大野加奈子

【総合研究】幼児教育学科

■社会福祉

指導教員 東 俊一

●統合保育において保育者が感じる不安・困難に対する専門機関の支援
尾崎 美久

●育児・家事参加に対する父親の意識〜父親の参加に対する母親の意識との比較〜
迫部 陽子

●障害のない子どもに対する「障害」の伝え方〜障害のある子どもに対する疑問への説明方法の検討〜
白拍子真美

●子どもの年齢別にみる母親の養育感情〜育児ストレス、養育負担感・困難感について〜
長廻 由香・望月 真美

●乳幼児保育
指導教員 光本弥生

●夜間保育について〜その変遷と現代の課題〜
生田 朋子

●保育所における食育について
鳴戸 香織

●スウェーデンの保育制度〜その内容と背景〜
原田 直佳

●病児保育についての一考察〜保育所における保護者の意識とニーズを中心〜
原田 仁美

●母性愛神話について
藤井 亮子

●ベビーサインについて
道田 理恵

●乳児の食問題と保育者の関わり
三村 恵

●「子どもをもつこと」に関する意識調査〜U町高校生のアンケートより〜
山田 紗世

●音楽
指導教員 安達雅彦

●身体表現のための作曲「気球に乗って〜世界旅行〜」
音地未知香

●ミュージカル「ヘンゼルとグレーテル」の制作
石川佳香・五藤都香・齋藤誠子・野元果林・別府志帆・松元かおり

●音楽教育
指導教員 山中 文

●子どもにとつての音楽遊びとは何か
葱花美加・中村優作・渡部祐土

●保育現場におけるジェンダー〜音楽活動の指導に内在する男女観〜
小林真弓・西原麻衣・若林真之

●造形表現
指導教員 金山和彦

●操り人形について〜糸操り人形の制作を中心に〜
中田 景子・中谷 愛

●幼児造形と現代美術の接点について
赤松めぐみ・小坂 直美・本田純加

●童謡詩人「金子 みすゞ」について
坂田 芙美

●発達心理学
指導教員 石橋由美

●3歳児保育〜絵本から始まるごっこ遊び〜
石飛優子・嶋野美恵

●人々の不安・怖れと妖怪
大山 直子

●幼児教育の生成・発展的カリキュラム〜レッジョ・エミリア保育実践「小鳥の遊園地」〜
小谷 未央

●日本のブックスタート
松岡 典子

●3歳児の保育とあそび〜「いれて」「いいよ」って見えるよ〜(木村和子実践)に学ぶ
松山さつき

●虐待によって形成された被虐待児の性格について〜『心的外傷と回復』(J・L・ハーマン)を手がかりに
森本 寛子

●貧困の世代的再生産〜母子家庭を中心に
宮崎真里子

●保育所における子育て支援〜広島県カリキュラム委員会の指導計画に学ぶ
吉田 明子

● 幼児体育・身体表現
指導教員 片山啓子

● 舞踊作品の制作／創作ダンス「気球に乗って／世界旅行」／

小鉄さゆり・竹本妃砂・寺本志保・東末有加・長井真弓・檜垣好美・藤原美穂

■ 幼児教育

指導教員 高月教恵

● 自由保育について／明治期から昭和初期にかけて／ 赤堀 礼子

● 早期教育について 田路 弓子

● 絵本の読み聞かせ方について 永畑 涼子

● 私が出会った気になる子どもについての一考察 幡手 友恵

● 子どもの基本的な生活習慣について／モンテッソーリ教育の視点から／ 古館利江子

● 保育実践における子ども理解について／保育者のかかわりの視点から／ 森永 雅美

● 戦後の幼稚園における音楽的活動の取り扱いについて／幼稚園教育要領を中心に／ 和田依里子

● 絵本「桃太郎」の研究 重岡 瞳

【地域福祉研究】地域福祉学科

■ 指導教員 村中哲夫

● 省察「アイデンティティ」 古川 政史

● 茶飲み話と介護 宮本千恵子

■ 指導教員 井関智美

● 介護者の資格の違いによる医療行為の実施状況 伊藤 舞

■ 指導教員 岩崎竹彦

● 『記紀神話』が伝えるもの 池町 悠子

● 現代日本の夫婦観 稲葉 志穂

● 阿新地域の年中行事と食事 田井佐代子

● 「神と妖怪」 谷本 佳子

● 流行歌と回想法 中屋 早智

● ヒーローの変遷／移り行くヒーロー像／ 『もののけ姫』にみる人と動物の共生 西本 光男

● 『もののけ姫』にみる人と動物の共生 安田 伶香

■ 指導教員 藤井敬美

● N市における精神障害者への地域生活支援の現状と課題 越畑真菜美

平成 15 年度 進路状況

(2月13日現在)

内訳 学科	卒業生数 (人)	専門職 (人)	一般職 (人)	進学 (人)
看護 [22期生]	57	37	0	11 (9)
幼児教育 [23期生]	56	42 (13)	1	0
地域福祉 [7期生]	55	39 (11)	1	4

() 内は、希望しているが決定していない人数

ご入学おめでとう

〈退職〉

地域福祉学科講師

松久保博章

ご入学おめでとう

〈新採用〉

地域福祉学科講師

松本百合美

受賞のお知らせ

平成十五年年度には本学古城幸子教授が地域医療事業功労者表彰で岡山県保健福祉部長表彰を受けられました。さらに、本学看護学科のグループが、研究課題「山間地域の在宅高齢者への健康・生活相談に関するITの活用」により第二十五回両備檉園記念財団・生物化学部門の研究助成金を受賞されました。記して慶祝の意を表したいと存じます。



絵・大野加奈子



今回は同窓会のコーナーで様々な形で外国に進出している卒業生の皆さんの声を集めてみました。スペーアの都合で三人しか紹介できませんでしたが、他にも外国で活躍する方々もおられると思います。機会がありましたら第二回の特集を組みたいと思います。

さて四月から本学に保健師養成のための地域看護学専攻科が開設されます。Think Globally, Act Locally (国際的な視野を持って地域のために働く) をスローガンに掲げておりますが、このスローガンは保健のみならず、全ての職業に当てはまると思います。皆さんもそれぞれの職種で、また地域で活躍ください。

(山内)

◆表紙でお知らせいたしましたように、平成十五年十月十九日に公開シンポジウムが開催されました。本学の将来像についてのご意見をお寄せください。

編集委員

委員長 委員

原田 信子
古城 幸子
山内 淳一
吉村 俊光
東原 光
神原 光